

## 17. イレウスに対する高圧酸素療法について

千見寺 勝\* 太田 幸吉\* 三枝 俊夫\*  
 斎藤 春雄\* 樋口 道雄\*<sup>2</sup> 奥井 勝二\*<sup>2</sup>  
 野口 照義\*<sup>3</sup> 中田 瑛浩\*<sup>4</sup>

われわれは、先の本学会などにおいて、イレウスに対する高圧酸素療法の意義について報告して来た。家兎を用いた動物実験では、2 ATAで腸容積は約 $\frac{1}{2}$ に縮小し、腸管組織酸素分圧は約13倍に上昇することを観察し、また、腸管組織については、高圧酸素療法により、イレウス作製腸管の出血、ピラン、粘膜下の浮腫などよく阻止されることを認め、イレウスに対する高圧酸素療法の効果の一端を観察した。一方臨床例においても、多くの症例で著効をみたわけであるが、今回は、その臨床例の総まとめという意味で、最近の症例を含めて検討した。

1976年11月から、1978年8月までの約1年10ヶ月間に、当科で高圧酸素療法を施行したイレウス症例は55例である。(表1) これらの症

表 1

CASES OF ILEUS		
Hyperbaric oxygenation institute, Chiba Saito Rosai Hospital 76.11-78.8		
	No. of Cases	OHP (times)
improved	39 (70.9%)	1 - 24
operated	16 (29.1%)	1 - 30
total	55	

例に対し延べ485回、本療法を施行した。このうち、有効例は39例、70.9%で、高圧酸素療法

- \* 福生会斎藤労災病院
- \* 2 千葉大学第1外科
- \* 3 同 中央手術部
- \* 4 同 泌尿器科

が無効で手術を施行した症例は16例、29.1%となっている。四方<sup>1)</sup>の全国集計をみると、イレウスで手術をうけた症例が68.7%となっており、当科の結果とは全く逆の割合を示している。もっとも、これは積極的に保存的治療をするか否かの態度によって数字が変わって来るわけであるから、一概には評価出来ないとしても、高圧酸素療法においては、約7割の症例で、非手術的にイレウス解除が可能であるという点、注目すべきことと考えられる。

さて、有効例をみると表2の如くで、癒着性イレウス、麻痺性イレウスが殆んどである。

表 2

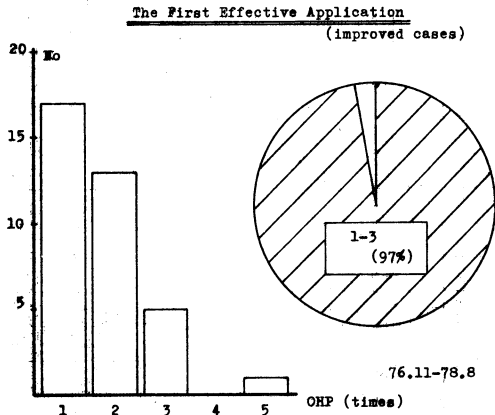
<u>Improved Cases</u>		
76.11-78.8		
	No. of cases	OHP (times)
adhesive	28	1 - 23
volvulus of sigma	1	8
paralytic	10	3 - 24
total	39	
<u>Operated Cases</u>		
76.11-78.8		
	No. of cases	OHP(times)
adhesive	3	2 - 3
strangulated	4	2 - 30
carcinoma	5	1 - 26
incarcerated hernia	2	8 - 11
volvulus of sigma	2	1 - 3
total	16	

有効例での治療回数は、1回から24回で、平均9.4回である。ただし、これは延べ回数であ

り、イレウス解除後も、症例に応じて本療法を継続施行している。

それでは、イレウス解除に要する高圧酸素療法の回数はいくつかということで統計をとってみると、図1の如く、第1回目の本療法施行に

図1



より、自覚的にイレウス症状の緩和をみているものが最も多い。3回目までを含めると、97%の症例で、何らかの形で症状の軽快をみている。このことから、高圧酸素療法では、3回の施行により症状の改善がみられないものはほぼ無効ということになり、手術適応決定という面で、有力な判断材料になると考えられる。

さて、無効例は、表2の如く16例あった。癒着性イレウスで手術をうけた3例は、いずれも高度な症例で、腸切除などが施行されている。

無効例の高圧酸素治療回数をみると、1回から30回、平均7.5回であった。無効であったにもかかわらず長期に亘って施行した症例は、軽快と憎悪を繰り返すという形のもので、イレウス解除の期待を捨てきれずに長期間経過を

てしまった症例である。このことは、翻って考えれば、複雑性イレウスで、結局手術適応の症例でも、高圧酸素療法により、ある程度時間的余裕がもてるということであり、例えば、リスクの悪い症例で、術前状態改善に要する時間を確保し得るということでもある。

然しながら、癌によるイレウスでの26回という数字は、大きな反省材料と考えられる。

従って先にも述べたとおり、有効例では、3回以内の本療法施行により症状の軽快をみ漸次快方に向うわけであり、この適応は厳格に守らなければならない。最近の症例については、その通りあてはめて施行している。最後に、術後イレウスという観点から検討してみると、表3の如きであった。絞扼性イレウスでは有効例は

表3

Results of OHP treatment in patients with ileus following surgery 76.11-78.8

	improved	operated
adhesive	28 (90.3%)	3
strangulated	0	4

なく、癒着性イレウスでは31例中28例にイレウス解除が可能であった。解除率は実に90.3%を示している。一般に保存的療法での術後癒着性イレウス解除率は、成績の相当優秀な施設で70%前後<sup>2)</sup>であるから、高圧酸素療法の有用性は特筆すべきものであると考えられる。

#### 文 献

- 1) 四方淳一：イレウスの治療方針，全国集計より。日臨外会誌。39(4)：453, 1978。
- 2) 岩淵正之他：癒着性イレウスの保存的療法。日臨外会誌。39(4)：466, 1978。